



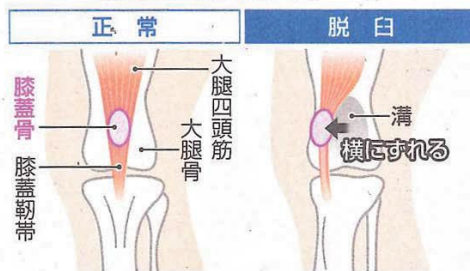
二丁動物病院院長
(富山市経営)
古藤 寛規

膝蓋骨脱臼は、膝のお皿（膝蓋骨）が本来ある溝から横にずれてしまう病気です。パテラともいわれます。小型犬でよくみられますが、どの犬種でも起こることがあります。軽症例では、時々後ろ足をびよんと上げる、数歩だけスキップするように歩くといった変化だけで済むこともあります。繰り返すことで痛みや関節炎につながることもあります。

膝蓋骨は、大腿骨の先にある溝

犬の膝蓋骨脱臼

膝蓋骨脱臼のイメージ



の上を滑るように動き、膝の屈伸を助けています。膝蓋骨脱臼では、このお皿が内側または外側に外れ

歩き方の変化に注意

てしまい、膝の動きが不安定になります。犬では内側にずれるタイプが多く、片足だけのことも、両足にみられることもあります。

原因の多くは、成長過程で膝周囲の骨や筋肉の並び、溝の浅さなどが関係して起こる発育性の病気です。外傷がきっかけになる場合もあります。膝蓋骨が何度も外れると、関節に負担がかかり、炎症や関節炎が進みやすくなります。

よくみられる症状は、後ろ足を急に上げる▽数歩すると元に戻る▽歩き方がぎこちない▽ジャンプを嫌がる—といったものです。悪化すると、地面に足を着けるのを

嫌がる時間が長くなります。常に脱臼した状態になると、ガニ股にみえることもあります。

ご家庭では、足を上げる回数が増えた▽散歩や遊びの後に痛そうにしている▽階段など段差を嫌がる▽以前より動きたがらない▽座り方や立ち上がり方が変わっている—などの変化がないか、注意してみてあげてください。

治療は、症状の強さや脱臼の程度、年齢、体格などをみながら決めます。軽症では、体重管理、運動量の調整、痛みの管理（鎮痛剤・サプリメント）、筋肉保持のリハビリや生活環境の見直しで様子を見ることがあります。脱臼頻度

が多い、痛みが強い、歩行異常が強い、また常に脱臼している場合は手術を検討します。手術では、膝蓋骨が正しい位置に収まりやすくなるように、溝を深くする、膝蓋靭帯の向きを調整する、緩んだ関節包を縫い縮めるなど、状態に合わせた方法を選びます。

悪化や再発を予防するため、日常生活の工夫はとても重要です。体重の管理▽滑りにくい生活環境を整える▽高い所からの飛び降りる—を減らす▽大腿の筋肉を維持するため無理のない運動を継続する▽歩き方の変化の早期発見—などが大事になってきます。

愛犬の歩く様子が気になる場合は、かかりつけの動物病院に相談してみてください。

毎月第1土曜掲載